

H28年6月4日 ソーレ 男女共同参画推進月間講演会

「女性の貧困 男性の貧困 ～私たちの求める生きやすい社会とは～」



日時：平成28年6月4日（土）13：30～15：30
会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」大会議室

講師 湯浅 誠さん（社会活動家/法政大学現代福祉学部教授）

東京都生まれ。東京大学法学部卒。2008年末の年越し派遣村村長を経て、2009年から足掛け3年間内閣府参与に就任。内閣官房社会的包摂推進室長、震災ボランティア連携室長など。政策決定の現場に携わったことで、官民協働とともに、日本社会を前に進めるために民主主義の成熟が重要と痛感する。

朝日新聞紙面審議委員および編集権に関する審議会委員、日本弁護士連合会市民会議委員。

【著書】

『ヒーローを待っていても世界は変わらない』（朝日文庫）、第8回大佛次郎論壇賞、第14回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞した『反貧困』（岩波新書）、『貧困についてとことん考えてみた』（茂木健一郎と共著、NHK出版）など多数。



★講演会を活かす

湯浅といいます。よろしく申し上げます。

今日のテーマは「女性の貧困 男性の貧困」ですが、いま日本の貧困率はどれぐらいか聞いたことがありますか。アメリカ、ヨーロッパ諸国、日本、韓国など先進34カ国が加盟しているOECD（経済協力開発機構）共通の方法で出した日本の貧困率は、16.1%、大体6人に1人ぐらいが貧困です。実態を金額でいうと、1人暮らしで年収120万、2人暮らしで大体140万ぐらい、3人暮らしで170万ぐらい、4人世帯で200万ぐらい。これ以下で暮らしてる人たちが、日本全体で6人に1人ということなんです。

では、高知県の貧困率を知ってる人はいますか。都道府県としての貧困率を出しているところは、日本には一つもありません。子どもの貧困率については、唯一出してる県が沖縄県です。日本全体の子どもの貧困率は16.3%ですけど、沖縄県は経済的に厳しい地域とよく言われる通り29.9%で高いです。

きょうまず私から皆さんにお願いしたいのは、ぜひ高知県も貧困率を出そうという話を広げてほしいということです。身近な数字が出たらやっぱり実感が違います。これは結構難しく技術的にできないと言われていたのですが、沖縄県が頑張っただけで、どこまで正確な数字に迫り切れるかの限界はあるでしょうが、出せないわけじゃないということが分かりました。関心のある方たちは、ぜひ高知県も対策を立てるうえでも実数とか実態をもうちょっと把握したほうが良いということ、いろんな機会に言っていただきたいと思います。皆さ

んがそのことを広めていただくことが一番高知県を変えていくわけです。

それをぜひ意識していただいて、きょうの話も例えば家族、職場の同僚、友だちや、あまりこういう話をしたことがないし、自分としては関心なさそうだなと受け止めてる人のことをイメージして、その方に働きかけるのに使えるフレーズがあるかとネタを拾う感じで聞いていただけるといいと思います。そうすると、今までよりそのことについて話せるボリュームが増えていき、伝わる人が増えていくかもしれない。講演会をそういうふうを活用していただきたいと思います。

★子どもの貧困

さて、子どもの貧困率が16.3と話しました。全国の貧困率は16.1です。子どもの貧困率のほうが高いんです。全国平均貧困率が2006年、2009年、2012年の調査では、15.7、16.0、16.1。子どもの貧困率は14.2、15.7、16.3。全国平均の伸び率に比べて、子どもの貧困率の伸び率が高く、5～6倍の勢いで伸びています。これはかなりまずいことだと思います。

ただでさえ子どもの数が減って、今新生児は1年間に100万人、団塊の世代に比べて、もう半分になりました。日本社会の将来の担い手である子どもの数が減っていく。少ない数でこの社会を回してもらおうと思ったら、一人一人により一層頑張ってもらわないといけない。だけど、その中で貧困状態の子どもの数は年々増えている。私たちの社会は自分で自分の首を絞めてないかという感じがするわけです。

その子たちはどういう家庭で暮らしているか。そこで、きょうのテーマの一つ「女性の貧困」。子どもの貧困率16.3%と言いましたが、子どもは誰だって基本的には無収入です。どうやって算出してるかということ、家庭の貧困状態を見て、その中で暮らしてる子どもの人数を割り出して、それを全体の率として出してるわけです。つまり子どもの貧困率というのは子育て世帯の貧困率です。

子どもというのは、定義上0歳～17歳です。親は30代、40代、50代、共働きかどうかは別にして、ほとんど働いています。この人たちの生活がじわっじわっときつくなってきていることです。収入が増えない。給料が上がらないとよく言います。だけど、一方にはガンガン稼ぐ人も出てきている、つまり格差が開いてきたんです。その結果、数字になって表れてるのが子どもの貧困率です。

★女性の働き方と貧困

中でもとりわけきついのが母子家庭です。離婚、死別、未婚、そういう母子家庭が日本の中で約130万世帯ぐらいです。今大体年間に60万組結婚して20万組別れますから、3世帯に1世帯は離婚しています。そういう意味では珍しいことではなくなりました。父子家庭の中にも大変な家庭はたくさんありますが、女性が一人になる、特に母子家庭はさらに生活がきつい状況で貧困率は5割を超えています。

女性は働いてもなぜ貧困率が高いのでしょうか。女性も男性も20代はやはり非正規率が5割を超えて高いです。しかし男性は30代になってくると8割～9割は正規で働いている、一方女性の非正規率というのは5割を超えています。女性が正規で採用されないのは、一つはやっぱりジェンダーの問題です。男は男であるがゆえに採用されやすく、女は女であるがゆえに採用されにくい。同じ正社員でもやっぱり女性と男性は違います。男性正社員の平均年収を10とすると、女性正社員が8ぐらい、男性非正規のが6ぐらい、女性非正規が4ぐらい。もちろんいろいろ変動はありますが大体そんなものです。

もう一つ大きいのは、結婚、出産を機にした退職です。女性も高等教育を受けて卒業後は男性と同じぐらい働きだすので就業率は高いのですが、1回下がります。それは結婚や出産による退職で、大体6割近い人が出産で辞めます。そして子どもが保育園や小学校に上がる頃また働きだして就業率が上がり、50代後半ぐらいから定年に向かってまた下がります。就業率が1回落ち込んで、もう1回上がって、また落ちてくる。アルファベットのMみたいになるこれをM字型カーブといいます。男性は1回上がった30代半ばぐらいまで横ばいになり、定年退職に向かって下がり、台形のような形になります。

この状態では会社側が、将来の管理職候補を選ぶとなると男性のほうに目が行ってしまします。それを選ぶ立場にも男性が多いということで、昇進にもだんだん男女で差がついてくるということになります。ではなぜ女性は結婚や出産すると辞めるのでしょうか。出産後すぐには働けないので当たり前と思うかもしれませんが、ここを何とかしようとしてきたのが先進諸国の格闘の歴史で、「もったいない」という発想です。優秀な女性にわが社で働き続けてほしいと思っても辞められる、キャリアが中断しちゃう、もったいない。何とかこの人に働き続けてほしいと知恵を出していくと、「保育園をつくろう」「育児休業制度をつくろう」という話になり、出産を乗り越えられる就業条件、労働条件を少しずつ整えてきたのです。

今はスウェーデンの女性の就業比率は男性と変わりません。M字型カーブも解消されました。そして出生率は1.8で、日本よりずっと高いです。つまり子どもを産んでも仕事を辞めない、辞めなくていいからです。70年代にはスウェーデンも日本と全く同じようなM字型カーブを描いてました。30年~40年かけてこのくぼみがだんだん減り、男性と同じ曲線を描くようになってきました。スウェーデンのようにやっている国があるってことは、日本にできないわけではないということになるのですが、残念ながら、現状はまだできていません。

★出生率と女性の就業率

諸外国のデータでは就業率が上がってくると不思議なことに、出生率も上がってくることを示しています。女性が働きだすから子どもが減るというのは誤解ですが、まだ日本には思い込んでいる人がどこ行っても結構多いです。どういう条件を整えるか。何を優先して順位をつけるかという条件次第です。「子どもを安心して生み育てられる状況をもうちょっと増やそう」これが優先順位のトップになっていくと、M字型カーブが減っていくはずなんです。

「一億総活躍」絡みで言われた希望出生率は、産みたくない人は産まなくても結構、3人生みたい人は3人というふうに、それぞれの希望でいくと日本の場合でも出生率というのは1.8までいくはずなんです。

内閣府は未婚の男女を対象に結婚についての調査をずっとしています。そうすると、「将来結婚したいですか」には女性も男性も9割が結婚したいと答えます。「何人子どもが欲しいですか」では9割の男女が2人欲しいと言っている。0.9×2=1.8というシンプルな計算です。「時代は変わった、価値観は変わった」と言われますが、これは約30年前から変わっていません。

希望する数だけ産めれば1.8までいくわけなんですけど、それができないので、今1.4です。その背景には、子育てが心理的にも経済的にもきつい状況があり、やはり育児、家事の負担が女性に、一方的に偏っているということがあります。

ルポライターの北村年子さんは「有史以来、母親と子どもが24時間、数年にわたってここまで密着する時代はかつてなかった」と言い、母親と子どもの、離れたくても離れられない、ずっと一緒の状態を「カプセル母子」と呼んでいます。マンガ「サザエさん」では、サザエさんとタラちゃんは二人だけのシーンより、誰かと一緒にいるところばかりです。でも今、現実ほとんど母親と子どもでいて、母子家庭じゃなくてもそれがずっと続くんです。気がおかしくなりそうだと思って当たり前だと彼女は言っていました。

★長時間労働問題

何でこういうふうになるか。一応いま両親のいる家庭を想定して話していますが、相方である男性のほうはずっと会社にいるからです。これが長時間労働問題です。朝6時か7時には家を出て、帰ってくるのは夜9時か10時では、家事なんかできない、子育ても妻に任せっきり。「よろしく頼むよ、おれは一生懸命外で働いて稼いでくるから」となると、一方に長時間労働があって、一方に家事、育児を担う人がいて、そのバランスが変わらない限り、女性はやっぱり結婚、出産を機に辞めざるを得ないという状態が続くんです。

これではまずいというところで、言われたのが働き方改革です。長時間労働を何とかしないといけないけれどまだ着手されてないわけです。今「女性活躍」ということが言われていても、要するに、「家事も育児も仕事もやろう」ということなんです。

しかしこれは基本的には無理です。「女性活躍、もちろん結構だけど、ちょっと自分はその話

から置いてかれてる」と感じる人が多かったです。でも、それをやっている人はいて、シングルマザーたちは、家事も育児も仕事もやってきたわけです。自分しかいないんだから、自分で稼ぎに出る。子どものことがあるからフルタイムで働けないので、非正規の仕事を掛け持ちして、全部やってきています。

そして、シングルマザーたちは働いても働いても5割以上が貧困です。世界と比べて日本の貧困層の最大の特徴は、やたらに働いているということです。貧困になるのは働いてないからだろう、逆にいうと、働いてれば貧困から抜けられるはずだと、漠然と思っていませんか。それは事実と異なるので、この機会に考え直してください。シングルマザーの就業率も80%近くで世界トップを、ずっと何十年も続けています。働いているけれど貧困だという人が多い。この状態を「ワーキングプア」と言います。この言葉は10年前にできました。

シングルマザーたちは、残念ながら貧困だけど、仕事もやり、家事、育児もやり、今の女性活躍の模範みたいな人たちです。表彰もんだと思うんですけど、聞こえてくるのは、「じゃあ離婚しなきゃいい」「そんな男と結婚するのがそもそも悪い」そんな言葉で何だか踏んだり蹴ったりという感じですよ。

ある枠から飛び出たり、はみ出してしまった途端に、そこには何もなくて、あっという間に生活が苦しくなる。枠の中にいる時は、いろんなものに守られていることを自分が意識していないので、何もない状態をイメージできない。何とかなっているときに、何ともならない人を見ると、「何とかやりようがあったはず」「やらなかったのは本人に問題があるのでは」と思ってしまう。悪気はないんですけど、そういうふうになってしまうんですね。

私は「傘の内と外」と言うんですけど、例えば父親が家を建てたとき、私は父親の傘に守られて、父親は会社の傘に守られて、そして会社は国の傘に守られていた。この傘が三重に重なって合っていると滅多なことでは濡れません。しかし何かの拍子に傘の外に出ると、収入は確かにきつくなります。正規よりは非正規がきついです。それはお金だけの問題ではなく、見られ方の問題があるんです。「傘の中の人はずっとちゃんとやっている」「傘の外の人はずっとちゃんとやらない」というふうに見られ世間体も悪いし、何かあったときにセーフティネットが効かない。お金だけではなくていろんな面で何もないんです。このいろいろな面での何もないさを、私は「すべり台」と言ったんです。あっという間にすべり落ちる。

男性の長時間労働の問題も、女性の非正規や、子育てや、子どもの貧困もそういう意味で問題が全部つながっています。独自性もあるけれど、いろいろなところでつながっている。これさえすれば、後は全部ほっといても片づくというものはなく、いろんなことを積み重ねていくしかないです。

中でも大事なものは、やはり長時間労働問題だと思っています。労使協定さえ結べば極端な話、月1,000時間の残業だってできる。合法です。過労死が一番最初に社会問題になったのは1978年でした。あれから40年経ち、ようやくここまで問題になったことはいいことです。

もちろん日本は、国が企業に強制的に何でも命令できる国ではありませんから、企業の自主的な取り組みが必要です。しかしこの間、残念ながらあまり自主的に取り組まれてきませんでした。ある程度の長時間労働の上限規制は必要だと思います。厚生労働省が過労死してもおかしくないという月80時間を残業の上限にしたらどうですか。せめてそれぐらいに何とか抑えられないかなと思います。ぜひ男性の長時間労働をもう少し抑えて、男性が家事や地域、育児にかかわれる時間を増やすことができると、家事の分担も進むので、女性が継続的にキャリア形成できるようになって、優秀な人はよりそこに足を取られることなく活躍できる条件が整っていくでしょう。

そして、そういう状況の中で女性のキャリア形成ができるようにすることと、シングルマザーだけではないですが、そうした人たちの暮らしやすさをつくっていくことが重要です。生きやすさ、暮らしやすさをつくっていくのはなかなか一朝一夕にはできません。生活困窮の人たちと付き合ってきて思いますけど、本人の中にはやっぱり長年蓄積した「世の中は何もしてくれない」という感覚があるわけです。何もしてもらってこなかったし、何か責められてきたと、本人は実感として思っているわけです。「大変だったら言ってくればいい」と軽く言われると、

カチーンときて、そういう人には相談したくないという気持ちが先に立ちます。なので、共感というか、相手の置かれた状況を理解する力が要ります。あたかも何か言ってこないおまえが悪いみたいな言い方をする人がいますが、それだと余計こじれていきます。

★格差の拡大と固定化

子どもの貧困に関しては、まずは具体的な実態と数字を把握することからでしょう。話題になってきた「こども食堂」が高知でも始まり、全国的にもものすごく増えています。子どもの学習支援も学生さんによって行われ、ご飯なら地域の方たちが作れるというようにうまく具合になってます。大事なのは、そういうところでいろいろな価値観の人に出会うということです。

ある時「こども食堂」で鍋を作ったそうです。みんなで食べていたらある高校生の女子が「みんなで鍋をつつくって実際にあるんだね」と言いました。その子はそれまでテレビの中でしか見たことなく、鍋をみんなでつুকというのは、スーパーマンが空飛ぶみたいに、テレビの中で起こることなんだろうと思ってたわけです。

このとき周りの大人が何をしていたかという、一緒に鍋つついていただけで、何も特別なことはしていない。でも、その女の子にとっては一生の思い出になるんです。そのとき大人はいただけ、いるだけで支援になる。肩をいからせて、何かを教えようとしないうほうがむしろいいぐらいだという感じです。自分たちが想像もつかなかったようなことで驚いたり、喜んだり、悲しんだりする。他人ってそういうものですけど、育ってきた環境がかなり違ったりすると、こちらが驚くようなことで驚いたりするわけです。

ある時長野県の高校から、是非大学生に来てもらいたいと頼まれました。なぜかという、その高校は大学に行く生徒がほとんどいないし、周りに大学がなく、高校生の生活エリアだと、大学生に会ったことがない生徒のほうが普通だということです。

一方、私の大学は進学が当たり前という環境で育ってきた人が多く、自分の先輩たちも兄弟も自分の友だちもみんな当たり前のようによく大学へ行った。大学生に会ったことのない高校生がいるということがショックだった。そんな特別なことではなくても、交わることでお互いに学ぶものがあるわけです。

格差が拡大して固定化していくと、人生の経験が交わらないということが起こります。お金の差が開くだけではなく、人生の経験が変わってしまうということです。だから、格差の固定化は怖いんです。

都会では例えば小学校から私立に通っている子も多く、小さいころから同じような経済状態の子どもたちに囲まれて、当たり前のようによく小学校に行き、当たり前のようによく中学受験をし、高校に行き、当たり前のようによく大学に行き、当たり前のようによく就職し、当たり前のようによく結婚していく。それがその人にとっての当たり前で、何も疑問に思わないのです。「みんなそうなんだろう」くらいに思っているでしょう。

他方で、在学中に半分から3分の2ぐらいの同級生が辞めていく高校を出て、自分はコンビニでバイトしているけど、かろうじて働いているのは、知っている中では俺だけだ。あとは誰一人働いているやつなんかいないし、何をやっているのか分からないやつばかりだというのが当たり前という子がいるわけです。

早いうちから分離されると、あまりにも見えているものが違いすぎて、当たり前が違いすぎて、二人の会話は成り立たないです。そういう状態が進んでいくと、世の中は分裂していくということです。そして、相手の言っていることを否定してしまう。「おまえは分かってない」「何言ってるんだ」「おまえ、ばかじゃないの」そういうふうな言い方になって、意見が二極化していったり分極化していったりします。

経済的格差が広がると、政治的な意見も分かれ、二極化していくことは実証的に明らかで、これは世の中を統治する人にとって一番怖れなくてはならないことです。社会統合ができなくなって、分裂していくということですから。日本はその点では苦労しないでやってこれたのですが、もしかしたら、今後しんどいところに行くかもしれません。違う意見の人たち同士が意見をぶつけ合うということに慣れてない分、もしかしたら、アメリカよりも厄介なことになるかもしれません。

そういうことが格差の問題なので、学習支援とか食事支援とか、お金だけではなく、これは社会のあり方や民主主義のあり方の問題といってもいい。なので、貧困の問題は、やっぱり社会的に対応していく必要があります。その「社会的に」というのは、「私たち一人一人が」ということです。そのためには、ぜひ知るべきことを知って、知ろうとしてもらって、そうやって情報を集めることが必要です。

★社会の問題として、自分事として

東日本大震災にずっとかかわってきて5年経ちました。やはり普段できないことはなかなかできません。ああいうことが起こったからといって、あしたから人間変わるわけではありません。駐車場に寝泊まりした人の多くは、子どもがいたり、発達障害の子どもを抱えていたり、認知症のご家族がいたりというように、何かしら課題を抱えている家庭でした。「静かにさせろ」みたいな話になり、周りの人たちにそれを受け止める力がないわけです。だから、別に出ていけと言った人はいないでしょうけど、出ていかざるを得ないような感じになり、結果的に排除してしまったわけです。

震災が起こった時、普段やってないことはできない、普段が大事だと皆さんおっしゃる。それも大きな災害を経験して初めて分かる。これだけ頻繁に起こって経験が徐々に蓄積されてきているはずですが、大きな災害に出会うのは誰でも一生に一回くらいですから、やっぱり人生初なんです。あのときこうしたという経験が自分の中にない。だから普段どれだけやれているかが、そこで利いてくるわけです。

是非この普段が大事ということを私たちの課題だと受け止めていただきたいと私は願っています。そのためには自分事にしてってください。自分事にするには何がいいかというと、人に話すのが一番いいです。人に話すと聞き返されたりしますから、そうすると何か答えたりしなくてはいけなくなって、だんだん自分でまじめに考えなくてはという感じになってくるんです。

じゃあ自分も何かやってみようという気になったり、そういうふうにしちゃべってるとやっぱり責任が出てくるので、自分で自分をそこに追い込んでいく感じもあります。ぜひ自分で自分を追い込んで、自分事にしていただく。そういう方が増えていくと、高知県はより一層暮らしやすく住みやすい町になるんじゃないかなと思います。是非みなさんのご活躍を期待しています。